
お面を付けた神隠し

桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お面を付けた神隠し

【Zマーク】

Z2192U

【作者名】

桝

【あらすじ】

全ての始まりは10年前。

穏やかだった小さな町は、じわり……じわり……と足音も立てずに忍び寄る恐怖に気が付いた。

田を離したつもりはない、一瞬の出来事だった。

その日、両手では足りない数の幼児が、小さな町の中の様々な場

所から姿を消した。

数日が経つても、数週間が過ぎても、何の手がかりも見つか
りぬまま小さな町は怯えつけた。

数か月もすると、何も進展のないこの事件は静かに、迷宮入り
で幕を閉じた。

=====

これが、当時子供だった僕らが教えられ、そしてほとんどの住民
が信じている事件の全容。

けれど、実はこの話には続きがある。
この話を聞く限りじゃ、消えた子供達は誰一人戻らなかつたよう
に聞こえるけど、そうぢゃない。

戻った子供も確かにいる。

今も、この小さな町で、生きている。
そして、全てはまだ始まつたばかり……。

=====

この話はファイクションです。
恐いお話ではありません。

ほんの少しだけ男の子同士のお付き合いが入るかもしれません

10年前。（前書き）

他に書いている作品が行き詰つまして、でも新しいお話が書きたくなりついつい手が動いてしまいました（苦笑）
でも前の作品も今回も出来ればゆっくりでも最後まで完成させたいと思つてゐますのでどうか長く田で読んでやってください。

10年前。

あの恐ろしい事件から、もう一ヶ月がたった。

事件は起こつても、その後何があるとゆうわけでもなく、誘拐なんか事故なのかも分からず、手掛かりもないまま幾日も過ぎ去り、誰もが諦めかけた頃、事件の被害者である子供が見つかった。

小さな町の、小さな森の奥にある神社の境内にぐつたりと倒れていたところを神主が見つけ、警察に連絡をしたそうだ。
パトカーや救急車が駆けつけ、子供を乗せた救急車が病院に着くと警察から連絡を受けた両親が先に来て待っていた。

「あのっ、子供はつ！ 子供達は本当に無事なんですか！？ あの子達は今どこにいるの！？」

……そう、助かった子供は2人。

慌ただしく警察や病院の関係者が院内を行き来する中、子供の母親らしき女性が、普段はふわふわしていそうなパー・マがかつた栗色の髪を振り乱して目の前を通り過ぎようとしていた警察官の腕を掴み、乱暴に聞く。

「うわあ！ なんだアンタ！？ 一体何処から入ってきた？！ ここは関係者以外立ち入り禁止区域だぞ！」

警察官は、暗い病院内で突然腕を掴まれたからか驚き、女性に負けない大声で怒鳴りつけてきた。

一方、女性は今にも泣き出しそうな顔で、目の下にある大きなクマよりも目立つ充血した瞳を潤ませた。

隣には父親らしき男性が立っているが、黒く長い髪を後ろで結び、眼鏡をかけていて色白で、いかにも気が弱そうな感じだ。

「花、少し落ち着きなさい。あの、警察の方ですよね？すみませんが、ここに男女の双子が運び込まれたはずです。病室を教えて頂きたいのですが、わかりますか？」

物腰も柔らかく、丁寧な口調で話してはいるが、この男性もまた、目の下には大きなクマがあり、どうにも辛そうである。

「（）両親ですか？失礼しました。では、申し訳ありませんがまずは身分証の確認からさせていただいてもよろしいでしょうか？」

警察官も急に口調を変え、まあ仕事なのだろう。まず先に目の前に立つ2人を疑いのこもった目で見ている。

「はい、連絡が来た際に言われてあったので」

ポケットから2人分の身分証を取り出して、警察官に渡す。

「そうですか、どうも……。では少々お待ちください」

そう言つたきり、警察官は病院奥へ走つて行き、3分もしないうちに2人の身分証と他にも何かを握りしめて戻つて來た。

「確認しました。お待たせして申し訳ありません、ご協力に感謝

します。これはお返しします。それとのプレートは関係者専用の物です、もし誰かに声をかけられたらこれを提示してください」

警察官はは言いながら頭を下げる。

「あのっ、それで子供たちはー？」

ようやく落ち着きを取り戻した母親が聞く。

「はい、先ほど救急車が着いたばかりで、詳しいことは医者に聞かなければわかりませんが……どうも身体的に衰弱が激しいそうで、集中治療室に運ばれたようです。今は他の患者もいませんので、泊まり込みも許可されています。案内は」

「案内は結構です。お気遣いには感謝します。あの、それで、衰弱と言うのは、2人共ですか？2人は起きて話すことは出来ますか？」

父親の男は、一言一句聞き逃すものかと目を見開いている隣の妻の手を強く握り、警察官に聞いた。

「……お役にたてなくして申し訳ありませんが、詳しいことは医者ではないので……すみません」

警察官が本当に申し訳なさうに頭を下げたので、父親はそいえばそうだった、妻の代わりに自分だけでも冷静でいいようと思つてはいても中々に難しいなあと、自分も焦る気持ちや疲れを隠しきれていないことをここにきて自覚し、これから子供たちに会つのだからと氣を引き締めた。

「あ、いいえ。あの、誰に聞けば分かりますか？」

「病室こなま専任の看護婦がいるはずですので、せうじに聞くのが一番確実だと思われます」

「分かりました。」親切に元気もあつがといひをこました。じゃ、もつ行きます

「分かりました。」親切に元気もあつがといひをこました。じゃ、もつ行きます

「分かりました。」親切に元気もあつがといひをこました。じゃ、もつ行きます

「じつといひの話を聞いていた母親の女性も慌てて頭を下げ、小走りで夫の後を追う。

「時生さん？……あの警察官さん、良い人だつてわね。私、悪いことしちやつたわ」

前を歩く夫に、下を向いて歩きながら言つ。

「名前を聞いて置くべきだつたわ。乱暴に腕を掴んだりして……後で謝りたいもの」

「やうだね、でもきつとわかってくれていたと想つよ。花が、子供たちを心配しているからこそ、乱暴になってしまつてことも、今、いつもとても後悔している」とも。だからこそ、丁寧に説明してくれたんぢやないかな？」

少し、ゆくべつと前を歩きながら妻に聞く。

「…………やうね、ありがと。でもやっぱり後で謝つて来るわ。子供達には、いつも、悪いことをしたと思つたらすぐに謝りましょう

つて……そう教えてるのは私だもの

「うん、そうだね……」

夫は、疲れた顔に口元だけ、笑みを浮かべた。

そう、話している間にも、エレベーターは近づき、2人は足を止めた。

目の前には、誰も乗っていないエレベーターがあるだけで、他には何もない。

それなのに、2人は何故か、もう戻れないと、そう思った。

そして、2人はエレベーターに乗り、子供たちの病室へと向かつた。

10年前。（後書き）

怖くないお話をばすが、何故か自分でもちょっと怖いかも……
すみません。

これから明るくなつていいくはずだと思われます。

第一章 約束

空には闇が広がり、窓からは月の光が差し込む夜。

「秋冬しゅんと、見て……月が笑つてゐる」

ベットに寝転がりながら本を読んでいると、ベランダに出ていた双子の姉が嬉しそうに僕を呼んだ。

「月……？」

僕は、仕方なく読んでいた本を閉じ、ベットから降りてベランダへと出た。

「春夏しゅんか……？月が笑つしたの？」

僕が聞くと、春夏は真っ暗な夜空を指さして

「見て、綺麗でしよう？」

指の先へ目を向けると、三日月がまるで笑っているかのように、空に浮かんでいた。

「三日月だね、確かにまるで空が笑つてゐるみたいだ

「でしょ？？秋冬はいつも本ばかり読んでいるから、たまにほんのを見たほうが良いんじゃないと思つて」

夜空を見上げながら、そう言つて優しく笑つた春夏は、二日月の何倍も綺麗だと思うのは身内顛願だろ？お風呂上りで腰まである栗色のふわふわした髪はまだボサボサだけど、顔立ちは日本人離れしていく美人だし、背だって同年代の女の子よりずっと高いし……なんて関係ないことを考えていたら

「秋冬……？」どうしたの？もしかして……興味なかつた？」

僕がぼつとししている間に、春夏は心配そつた顔をして僕の方を覗き込んできた。

「……、ううん。呼んでくれてありがと？」

「そう、良かった。もしかして怒つているのかと思つて」

ほつとしたような顔で、胸に手を当つて言われた。

「春夏は、本当に小心者だよなあ。僕がそんな簡単に怒るわけないじゃないか」

そう、明るくて美人で家庭的な春夏にとつて唯一といつてもいい弱点は、気が物凄く小さいことなんだ。本当に憶病で、猫がすり寄つてただけで驚いて、小さい悲鳴を上げるくらいなんだ。すり寄つてきた猫も驚いて逃げるのを、僕は何度も見送つた……。

「……秋冬は、友達も多いし、冷静だし、私なんかとは、全然違うもんね」

春夏は俯いて、泣きそつなか細い声で言つ。

「……夏休みも終わって明日からまた学校も始まるし、もう寝るよ。春夏、夏って言っても夜はもう冷えるから、風邪引かないよう気を付けたほうが良いよ」

僕は、部屋へ戻り、ベットに潜った。

「……秋冬、ねえ……もう寝たの？」

ヒタヒタと足音をさせながら、春夏はベットの隣まで歩いてきて、僕に聞く。

「ねえ、秋冬。^{しゅん}もしかして、怒ってる？」

「…………。」「…………。

僕は、わかりきつたことをうじうじと聞かれるのが嫌いである。

「私なんかつて言つて、ごめんなさい。秋冬……なんか言つてっ。」

これ以上無視したら、春夏は泣く。仕方なく僕はベットから顔だけ出して、口を開きかけ、大きなため息をついた。

「はあ……。春夏にだつて友達はいるじゃないか、どうしていつも最後には、私なんかで終わるのさ。小さい頃は春夏の方が、……あれ？」

「どうしたの？」

何かを思い出せそうで難しい顔をしていた僕を見て、春夏はまた、心配そうに聞いてきた。

「……うん。何か、忘れているような気がして」

今、昔は春夏の方が友達多かったじゃないかって言にそうになつた。

「何かつて？」

「春夏は、昔からそつだつたつけ？」

突然、変なことを聞いた僕を、不思議そうに見ながら、困ったように笑つて言つた。

「え？ ううう意味？」

僕は春夏の瞳から視線を外さずに、続けて聞いた。

「昔から、気が小さい方だつたつけ？」

「……？ 当たり前でしょう。どうじて？」

どうじて？ と聞かれても、僕が聞きたいくらいだ。とは言えないしなあ。

「うん、なんとなくね。ほらっ、ほくらつてさあ、小さい頃のことほとんど覚えてないだろ？ それでちょっと、気になつただけ」

上手く説明できるほどじつかりしたものじゃない、ほんやりとした……よく分からぬ記憶だから、僕はおどけて見せてこの話はここで切り上げようと早口で言い切り、春夏にもう一度寝るよつと声

をかけよつとすると

「そう、秋冬は……知りたい？」

「え？」

春夏は一瞬、物凄く悲しそうな顔をして、すぐこいつの優しい笑顔へ戻り、聞いた。

僕は、少し戸惑いながら答えた。

「…………。そりゃあね？自分の事だし、いつかは思って出せたらうつて、思つよ」

「時雨おじさんが言つた

「何を？」

「何かを、知りたいと思ったら、聞いても良いからね？って」

「いつ？僕は聞いてない

なんとなく、予想はつく。

「おとうさんと、おかあさんのお葬式の日。秋冬、泣いてたから
……私」

「どうしてすぐ元に言わなかつたの？」

「まじ、ね？」

その時、僕は思わず、せつじの口調で聞いたと思つ。

「私は、昔の事なんか知りたくないもの」

そう言われてみれば、春夏はいつもこの話題を避けているようだつた。

「秋冬は、覚えてないみたいだから言わなかつたけど、約束したのよ？私たち……」

やぐやぐ？

「誰と？」

「分からぬいって、どういふ事？それに約束つて？」

春夏は俯いて、肩が小さく震えていた。

「私も、少ししか覚えていなかつたんだけど、約束の事は……お葬式の時に思い出したの。だから、相手が誰だつたか思い出せなくて……でもね？あの日、いつものように2人で森へ行つて遊んでた。夕方になつて帰らうとしたら、誰かに……声をかけられて、約束したの」

「森？つて、あの前の家の裏にあつた？」

「……」

春夏は声を出さずに頷いた。

「秘密基地とか作つて遊んだっけ、楽しかったよなあ。あそこへ
いれば誰にも見つからなかつたし」

僕が、懐かしさついで話すと

「また、行きたい？」

と、聞かれて、僕は、あれ？と思つた。

そもそも、そんなに楽しかったのなら何故行かなくなつたのか…。
それに、…

「……いや、どうしてか行きたくない」

そう、どうしてか行きたいとは絶対に思えないのだ。

「私も、行きたくない。ねえ、どうしてかな？」

考えたくもない、多分今の僕は顔面蒼白つてしまつなんじゃないか
と思つ。

「……そりや、よっぽど嫌なことでもあつたんじやない？まあ、
覚えてないんだからわからんないけど」

「秋冬、知りたい？」

春夏は、いつの間にか顔を上げ、僕を見てまた聞いてきた。

でも僕は、なんだか嫌な予感がしたし、春夏が急に真面目な顔をするから、もうすっかり冷めてしまった眼氣を急いで呼び戻して、とっても眠くてもうダメだつて振りをした。

「ううん、いいよ。それよりさあ、もう寝よ? 僕はもう起きていられないよ」

「え? ふつ、ふふつ何それ? 全く相変わらずね? 秋冬ったらマイペース! !」

一瞬、ぽかーんとして、目をまあるくしていたくせに、次の瞬間に笑って人の事をマイペースだなんて..... ノー天氣でいいよなあ。

「でも、でもね? 知っていた方がいいと思うの、私たちだけの事じゃないし」

「..... 何? それって、どういう事?」

「私たちは約束したの。家に帰してもうつかわりに、一年に一度は必ずあの子に会いに行くつて」

一息で言い切った春夏は、僕の方を見ているはずなのに..... どこか遠くを見ていた。

第一章 約束（後書き）

すみません！…続きますが、もう夜も遅いのでここで一度切らせていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2192u/>

お面を付けた神隠し

2011年11月13日08時17分発行